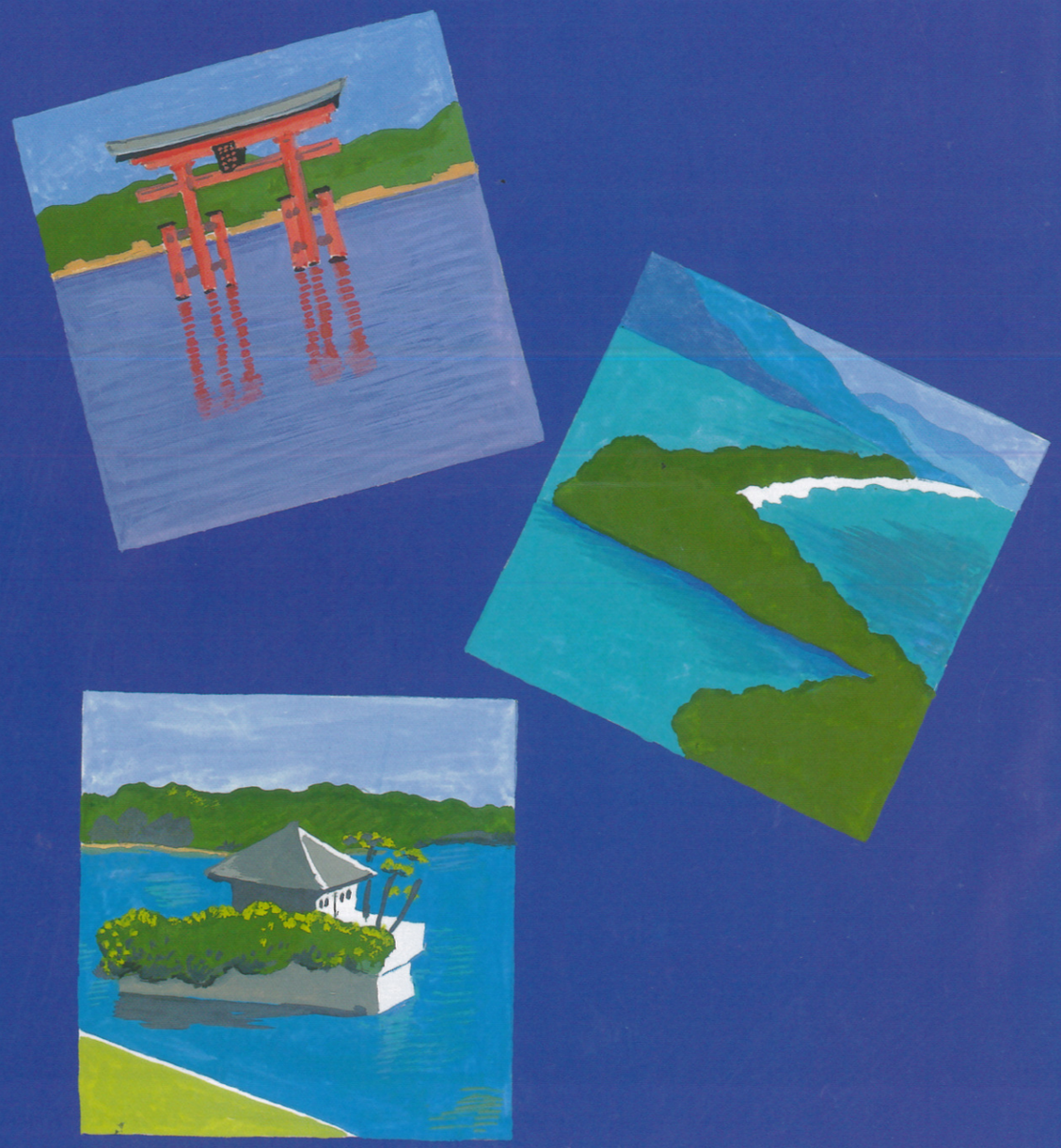
昭和34年4月21日第三種郵便物認可　平成28年7月21日発行（木曜日発行）（7月14日発売）第58巻第28号

週刊文春

7月21日号　定価400円



週刊文春
七月二十一日号
昭和三十四年四月二十一日第三種郵便物認可
平成二十八年七月二十一日発行（木曜日発行）（七月十四日発売）
第五十八巻　第二十八号
編集人　新谷学
発行人　鈴木洋嗣
東京都千代田区紀尾井町三―二三
郵便番号一〇二―八〇〇八
株式会社文藝春秋（大代表03（3265）1211）
定価四〇〇円
時次号発売まで
本体三七〇円

朝の元気を、ドライフルーツで。

時間がなくて朝食を簡単にすませていませんか？

いつもの朝食にドライフルーツをプラスするだけで、バランスのよい朝食に変わります。

「フルーツインスタイル」では、約50種類ものドライフルーツを日本を含め世界各国から取り揃えています。

あなたを元気にするドライフルーツがきっと見つかるはずです。

FRUITS IN STYLE

ピスタチオのいろどり、ココナッツの香ばしさが特長の「タフィー」。
さまざまな食感がうれしい、ついついあとをひくスイーツです。是非お楽しみください。

お求めは、PCまたはmobileサイトで。http://fruitsinstyle.jp　フルーツインスタイル　検索　大信実業株式会社 フルーツインスタイル事業部　Tel：03-5250-8022

雑誌　20403―7・21

4910204030764
00370

Printed in Japan
凸版印刷株式会社印刷

患者団体は「服薬をやめて病状が悪化したらどうするのか」

『週刊現代』医療記事はねつ造だ！

高血圧、糖尿病…薬の正しい「飲み方」「やめ方」とは？

コンボが公開した抗議文書

強い文言から怒りが伝わる

「週刊現代」7月9日号

誰もが利用する薬（写真はイメージ）

〈発言者の意図とは大幅に異なる歪められた発言が、あたかも当機構の見解と受け取れるかのように編集され「週刊現代」に掲載されたことはたいへんに遺憾であり、当機構は講談社および「週刊現代」編集部に対して厳重に抗議します〉

七週連続で医療関係の大特集を組んでいる「週刊現代」に対して、こう痛烈に抗議するのは、認定NPO法人「地域精神保健福祉機構」（以下コンボ）である。コンボは二〇〇七年の設立以来、精神疾患の支援に取り組んできた団体だ。

コンボは七月五日付で「週刊現代」編集部に〈「週刊現代」7月9日号特集「医者に言われても断ったほうがいい『薬と手術』」の内容と取材の経緯に対する抗議〉と題する抗議文書を送付し、その全文をウェブ上で公開した。抗議文書では「週刊現代」に訂正記事や謝罪文を掲載することなどを求めている。

両者の間で何が起きたのか。まずは抗議文書を紹介しながら振り返ろう（以下、引用のカッコ内はすべてコンボの抗議文書とそれに付随する「掲載文章と問題点を指摘する対照表」より）。

〈「週刊現代」7月9日号の特集「医者に言われても断ったほうがいい『薬と手術』」特集のなかにおいて、「衝撃の事実が明らかに 統合失調症の薬で85人死んだ」および「『うつ病』と『統合失調症』は薬を飲めば飲むほど悪くなります 認知症も考え直したほうがいい」という記事が掲載されました。この2つの記事において当機構の理事・職員の発言が著しく歪曲、加工されて掲載され、さらにこれらの発言が記事の60・2%を占める形で無断で使用されています〉

事の発端は、六月二十一日にコンボが厚労省に対して提出した「精神科における抗精神病薬ゼプリオンの適正使用に関する要望書」だった。その内容は、統合失調症の治療薬「ゼプリオン水懸筋注」を使用中の患者のうち、因果関係は不明であるものの、二〇一三年十一月の販売開始から約二年間で八十五名が亡くなっている（独立行政法人医薬品医療機器総合機構が公開するデータによる）が、他の抗精神薬と比べて死者が突出して多いのはなぜなのか明らかにして欲しい、ということなどを厚労省に求めたものだった。

この要望書に関して報道各社がコンボに取材する中、「講談社の週刊現代です」と名乗る記者からも電話があったという。

〈「医者に言われても断ったほうがいい『薬と手術』」という特集であることは一切告げられませんでした。（中略）そのようなテーマと構成であることを事前に告げられていた場合、当機構の基本的な考え方と方向が異なりますので、電話での取材にお答えすることはありませんでした〉

さらに、抗議文書は「週刊現代」の取材や編集手法を「ねつ造」と断じている。

〈記事掲載の事前連絡や雑誌発行の連絡すら当機構に対して行われていません。このように当機構の理念とは大幅に異なる記事を、当機構の名称および個人名によって過半数を構成したことは許し難いねつ造（事実でないことを事実であるかのように伝える）であり、当機構の名誉を著しく傷つけるものです〉

問題点も具体的に指摘されている。

「このような発言を一切していない」

抗議文書によると、これは丹羽氏が多剤大量処方の危険性（複数の抗精神病薬を大量に処方し、強い副作用をもたらす）について説明した発言にもかかわらず、個別の薬の問題にすりかえられているという。

〈多剤大量処方によって突然死のリスクが高まることにはエビデンスがありますが、上記2剤（※編集部註ジプレキサとリスパダール）で突然死が多い、という表現に根拠はありません。したがって、当機構の職員がこのような発言をすることもありません〉

また、同じ記事で丹羽氏はこうも語っている。

「統合失調症の患者に薬を出さないと、事故や自殺、タバコやアルコールなどの依存症で亡くなる可能性が高まってしまうので、まったく薬を使わないというわけにもいきません」

この発言については一刀両断だ。

〈このような発言を丹羽は一切していない。また、それに類似した話もしていない〉

このような指摘が多岐にわたってなされており、さらに次のように警鐘が鳴らされている。

〈読者も不安を感じ、服薬を中断し症状を悪化させてしまう人が現れる可能性も考えられます〉

コンボの島田豊彰専務理事に改めて話を聞いた。

「一番懸念するのは当機構の会員の不安や、その不安を端緒とする症状の悪化です。実際に『ゼプリオンを使用しているが、他の薬に変えた方が良いのか』『リスパダールやオランザピンを飲んでいて大丈夫なのか』という問い合わせが複数件寄せられています」

こうした週刊現代の報道を識者たちはどう見るか。

記事が「ねつ造だ」と抗議をする事態が起きた。さらに本誌が他の取材対象者にも聞くと、取材や編集方針への不満が噴出したのだ。

たとえば、「『うつ病』と『統合失調症』は薬を飲めば飲むほど悪くなります」の記事では、コンボの丹羽大輔氏の発言がこう紹介されている。

「また、統合失調症の治療に使われる抗精神病薬には、ゼプリオンのほかにもジプレキサやリスパダールなどがありますが、これらの薬を飲んでいる患者に突然死が多いことも、以前から知られていました」（「週刊現代」七月九日号）

七号連続で「医療批判」の大特集を組んでいる「週刊現代」。読者からの反響も大きいようだが、ここにきて、取材を受けた患者団体が、

統合失調症に詳しい、たかぎクリニック院長・高木俊介医師が言う。

「抗精神病薬に突然死などのリスクがあるのは事実です。しかし急に薬をやめると激しく再発することがあり、より悪化するケースもあります。したがって、薬をやめる場合には、慎重に少しずつ用量を減らしていかなければならない。統合失調症は患者さんに病識（病気の自覚）が乏しいことが多く、治療までに相当時間がかかります。副作用のリスクに警鐘を鳴らすのはよいのですが、薬をやめるリスクや、やめ方についても丁寧に書かないと、患者さんの人生を台無しにする恐れがあるのです」

一連の取材手法について、上智大学文学部新聞学科の田島泰彦教授はこう語る。

「記事の伝え方として不正確だし、フェアではない。薬を否定する編集部の方針に沿うよう、本来のコメントを意図的に操作しているものもあります。

医療記事は、生命に関わるテーマで、データが正確か、科学的論拠に拠った適正な内容かといった点が非常に重要。医師をはじめとする専門家のチェックを経た上で記事を掲載すべきでしょう」

今回本誌は、コンボが抗議文書の公開に踏み切ったことを受けて、「週刊現代」六月十一日号から七月十六日号でコメントしている医師や薬剤師、ジャーナリストなどに取材し、約三十名に話を聞くことができた。すると取材や編集方針への不満や抗議が噴出したのだ。

現代を読んで「服用をやめたい」

たとえば、降圧薬についてコメントしているある総合内科医はこう語る。

「『その薬、一度飲んだら最後、やめられません』などという医療完全否定のタイトルの記事にコメントしているとは思っていなかった。私の立場は医療否定とは真っ向から対立する」

記事の影響は大きく、医療の現場にも混乱が生じていると語るのは、長尾クリニック院長の長尾和宏医師だ。

「患者さんが『週刊現代』のコピーを持って来るんです。記事の中でミカルディス（ARB）やクレストール（高コレステロール血症治療薬）などの薬の名前が出てきます。現代を読んで、『服用をやめたい』と言う方への対応は正直大変ですが、ちょうどいい減薬の機会になる人もいます」

医学ジャーナリストの松井宏夫氏もこう言う。

「七月二日号の『妻に受させてはいけない手術』で私のコメントとして『女性特有のがんは早期で発見できた場合、手術で切除はせず、乳房や子宮を残したほうがいい』とありますが、元来、私ははっきりがんだと分かった場合、早期発見して早期治療しましょうという考えで、そういう言い方はしない。事前に内容を確認できず、記事が出てから知りました」

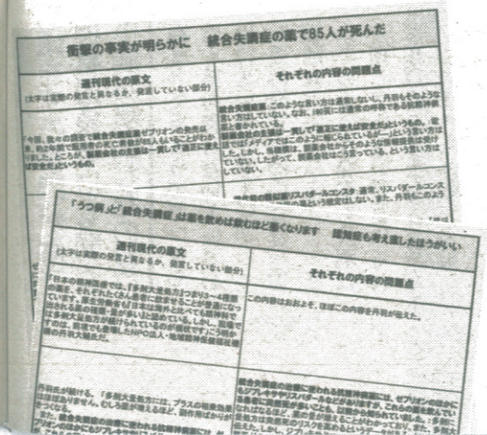
かもめメディカルケアセンターの藤井昭夫施設長もこう指摘する。

「『週刊現代』は忙しいようで、原稿の校正は無いし、電話がかかってくると即取材が始まるので準備する暇がない。六月十一日号『飲み続けてはいけない薬リスト①』にある私のコメントにも誤りが多いです。不眠症薬の『よく使われるジアゼパム』とありますが、これはベンゾジアゼピン系の間違いです。今はエチゾラムが主流です」

また、「無茶苦茶ですよ。記事に載っているのは百年前の話だ」と語気を荒げるのは、広島大学病院麻酔科の讃岐美智義医師だ。

「七月二日号『「1回やれば寿命が6年縮む」ども……ちょっと待った！　全身麻酔が身体に残す大ダメージをご存知か』の『麻酔から覚めるときに肺に痰などが入って肺炎を起こしたり、脳が酸素不足になって譫妄状態に陥るなど、重い合併症が起きるリスクがあります』という私のコメントは、あまりに説明不足。例えばもともと呼吸が悪い人は全身麻酔を受けると低酸素状態になる可能性があるが、誰もがそうなるのではない。そもそも、低酸素状態は放置しませんし、それを手術後の譫妄に結びつけるには無理がある」

六月二十五日号「大きすぎるリスク　外科医が告白『自分の家族に全身麻酔は絶対に受けさせない』」では、「マイケル・ジャクソンを死に至らしめたのは、日本でも静脈麻酔薬の主流となっているプロポフォールです（中略）マイケルを診ていた医師は気道確保すらせずその場を離れ、事故が起きた」との讃岐医師のコメントが掲載された。だが、讃岐医師はこう言う。



抗議文と一緒に公開された「掲載文章と問題点を指摘する対照表」

「電話取材でこの話はしていません。おそらく自著に書いた話を使ったのでは。麻酔の怖さを強調していますが、そもそもMJの主治医は麻酔科医ではない。使う文脈がおかしいですよ。掲載された二回とも原稿チェックはなしです」

こうした抗議等について、「週刊現代」編集部に取材を申し込むと、文書で回答があった。

まず、コンボが公開した抗議文書に書かれている主張について事実関係の確認と今後の対応について聞くと、こう答えた。

「本誌の、薬の危険性を読者に知らしめるべきという趣旨と、認定NPO法人『地域精神保健福祉機構』のゼプリオンによる死亡報告の原因究明を優先するという主張について、隔たりがあることは理解しますが、いずれにせよ、統合失調症薬ゼプリオンの服用で約2年間に85人が亡くなったという事実が大きな問題であるという考えについては共有しているものと認識しております」

さらに、取材先に事前確認がなかったり、誤りや加筆修正が含まれるコメントを複数掲載している点については、こう答えた。

「コメント取材については、もちろんのこと、限られた時間の中で丁寧かつ慎重に行っております」

「週刊現代」がこうした大特集を続け、大きな反響があるのも、世の中に根強い医療不信があるからだろう。ただ、ずさんな取材に基づく記事では何も解決しない。

実際に、読者や患者が最も知りたいことは、薬の副作用ばかりではなく、本当に正しい薬の「飲み方」と「やめ方」ではないか。

本誌では服用している人が多い、高血圧と糖尿病の薬について、専門家に解説してもらった。

EBM（科学的根拠に基づく医療）の専門家・金沢大学附属病院総合診療部特任教授の野村英樹医師が語る。

命さえ脅かしかねない

「一種類の降圧薬を飲んでいて、早朝の収縮期血圧が百十程度なら、減らす方向で考えていいでしょう。多くの人が一年を通して、同じ薬を同じ用量で飲み続けていますが、これは間違いです。夏の時期は、用量を減らしてみる、効き目の弱い薬に変更することも考えるべきですね。ただし、他に心臓病などの合併症がないことと、減塩、運動を生活に取り入れることが条件です。

必ず医師に一週間やめることをきちんと報告してからチャレンジするようにしてください」

降圧薬だけでなく、糖尿病の薬も急にやめるのは危険だ。おない内科クリニックの小内亨院長が指摘する。

「『週刊現代』は『糖尿病の薬はもう飲まなくていい』と糖尿病薬の実名をあげて批判していましたが、やめたら血糖値が上がって合併症を引き起こす可能性には触れていない。あまりに不親切な記事です」

糖尿病が恐いのは、高血糖を放置し続けると、眼、腎臓、神経に合併症が起こり、心臓病、脳卒中、がんなどのリスクも高くなるからだ。もし薬を安易にやめてしまえば、病状が悪化しないとも限らない。

「仕事がいそがしい、経済的に苦しいといった理由で薬を無断でやめてしまう人がいるのですが、たいていは病状が悪化して医師のところに戻ってきます。ある方はすでに腎臓が悪かったのですが、経済的な理由で中断してしまいました。その後、戻って来たときには透析が必要な体になっていました。『週刊現代』の記事を読んで、医師に相談せずに薬をやめてしまう人が出ることを一番心配しています」（同前）

もちろん、糖尿病の薬も、患者自身が適切な食事療法や運動療法を続ければ、やめることは不可能ではない。ただその場合も、病状が悪化していないかなど、医師の指導やチェックを受けながら進めるべきだろう。

薬の副作用や多剤大量処方などのリスクを報じることに意義はあるが、危険性ばかり煽っても、患者の利益にならないどころか、命さえ脅かしかねないのだ。次号以降で、より詳しく薬の正しい「飲み方」と「やめ方」を紹介したい。